愛媛大学教育学部紀要　第55巻　27～40　2008

日本と中国における思春期の心の動揺[1]

（教育心理学研究室）　渡　辺　弘　純
（中国・中華女子学院）　武　　勤
（中国・大連外国語学院）　陳　　麗
（米国・ジョージタウン大学）　クリスタル，D.S.

Depression and stress in Japanese and Chinese adolescents

Hirozumi WATANABE, Chin WU, Li CHEN *and* David S. CRYSTAL

（平成20年６月11日受理）

問　　題

思春期（Puberty）とは，端的に言えば，青年期のはじめの発達段階であり，性ホルモンの分泌腺が成熟し，第二次性徴が現れる人生の一時期である（Colman, 2001）。西平（1995）は，「児童期から青年期への移行（transition）が行われる11～13歳の青年前期は，成熟を意味する“puberty”の時期，ことに第二次性徴（secondary sex-characteristic）に着目して思春期とよばれる。」と説明している。アメリカ心理学会の辞書（VandenBos（Ed.），2006）でも，“the stage of development when the genital organs reach maturity and secondary SEX CHARACTERISTICS begin to appear, signaling the start of ADOLESCENCE”と定義されている。また，久世（2000）は，青年期（adolescence）を「思春期的変化の始まりから25，26歳までの子どもから大人への成長と移行の時期」として特徴づけ，その移行を，（１）生物学的移行，（２）認知的移行，（３）情緒的移行，及び（４）社会的移行に区分しているが，思春期は，最初の生物学的移行と関わっている。現在，日本で広く読まれている中島ら編（1999）の『心理学辞典』では，思春期の年齢区分として，狭義には12～14歳，広義には12～17歳とし，今日では，生物学的に意味づけられる思春期よりも，社会的区分に重きがおかれ，大学生頃までを含む「青年期」として扱うことが一般的である，と記述している。そして，思春期の性的・身体的成熟へ向けての急激な変化が，精神面に大きな影響を与え，「内的な緊張や，やり場のない衝動がうっ積したりする。また，精神的には自我の独立に目覚めることにより第二反抗期を迎え，既成の権威に反発することで自らの個別性を主張し，独立を確認しようとする。この時期が疾風怒涛の時代とよばれるゆえんである。」（越川，1999）と，続けている。

この研究では，思春期という段階区分に，児童期から青年期にかけての性的・身体的成熟にとどまらず，これが契機となって引き起こされる精神的変化，すなわち，古くから「疾風怒涛（Storm and Stress: Sturm und Drang）」と形容されてきた時代を含ませることにする。最近，久世（2001）は，スタンレー・ホール（Hall, 1904）の疾風怒涛概念の日本やアメリカ合衆国での伝播と批判の過程について論じている。いわゆるホールの反復説（recapitulation theory）は，以前から批判されてきたが，疾風怒濤の提起にみられる青年期研究の開始の意義はきわめて大きい。しかし，現在の展開においては，青年発達において疾風怒濤が必ずしも普遍的に現れる現象ではないことが示され，青年発達の多様性（個人差）と文脈

1　この研究は，平成13年度～平成15年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(２)(課題番号13610143）による助成を受けて行われたものである。日本では渡辺が，中国では武が，それぞれ調査の実施を担当した。当初，渡辺とクリスタルが対面して，日本語版と米語版の調査用紙を作成した。その後，陳と渡辺が対面して，中国語版の調査用紙を作成した。中国語による自由記述の回答は，陳によって日本語に翻訳された。

との相互作用の解明が課題となっている。今日では，疾風怒濤のみならず，青年期自体が社会的に構成される概念として受け止められるようになってきている（加藤，2002）。加藤の立場からは，発達段階区分自体が揺らいでおり，「終結しない青年期」さえ想定される。しかし，ここでは論争には深入りせず，常識的理解にも合致する小学校高学年から高校生までの時期を思春期として位置づけることにする。

生物的生理的発達を超える意味における思春期が社会的文脈によって異なる現れ方をするのは自明である。当然，日本と中国の思春期，そして，そこで現れる心の動揺も相違しているに違いない。

いずれの国においても，思春期になると，親子関係に代わって友人関係が重要な位置を占めるようになる。日本における総務庁青少年対策本部（1989）の調査でも，中学生では，学校生活の満足の内容として，「友だちのこと」を挙げる者が圧倒的に多くなっている。同じ調査で，悩み事や心配事の相談相手が，小学生ではお母さんが第一位であったが，中学生では友だちが第一位に躍進し，学年を追うごとにその比重が増加していた。その一方で，近年，思春期における「いじめ」や不登校の深刻さと増加傾向が指摘されている。平成18年度には，小学校60,897件，中学校51,310件，高等学校12,307件，及び特殊教育諸学校384件，計124,898件の「いじめ」[2]が，小学校23,825人，中学校103,069人，及び高等学校57,544人，計184,438人の不登校児童生徒が，それぞれ報告されている（文部科学省，2007）。「いじめ」は，中学校１年生が最も多く，小学校４年生から中学校２年生まで，各学年とも１万件を超えており，不登校は中学校３年生で頂点に達している。わが国の思春期は，肯定的にも否定的にも友人関係が大きな影響を与えている。

これに対して中国でも，思春期における友人関係の比重が増大することは容易に想像できる。しかし，心の動揺は，別の文脈で生じるのではないであろうか。中国では，年率10％を超える高度経済成長の継続と急速な格差社会の進行があり，激烈な競争社会の様相を呈している（清水，2008：藤村，2008）。学校教育も例外ではなく，都市部における受験戦争の熾烈さは，大学の入学試験が行われる時期が「黒色の７月」と形容されるくらいである（姜，2001：張，2003）。中学生や高校生の学校での滞在時間は長く，多くの宿題や試験に追われている現状がある。小学校高学年を対象とした学習についての国際６都市比較調査（Benesse 教育研究開発センター企画・制作，2008）においても，東京と対照的な北京の姿が，認められる。そこでは，東京と相違する北京の子どもの特徴として，①２／３近い子どもが，競争が激しいとする社会観を持つこと，②多数が大学院までの進学を希望する高学歴志向，③がんばれば最上位の成績が取れるという認識，④宿題に取り組む時間の長さなど，が示されている。勉強に熱心に取り組む子どもの意識の背景には，競争社会と格差の急速な拡大があり，「勉強することが家庭や自分自身の状況を変える主要な手段」であるという歴史的文化的考え方と学歴社会がある（劉・付，2008）。そのなかで，「一人っ子」政策などとも関連して，家族からの期待がそれに追い討ちをかけており，子どもの精神的負担は重く，抑うつや焦燥感が広がっているといわれている。

河地（2003）の調査においても，中国の子どもの勉強重視は世界でも突出しており，日本の子どもにおける友だちの重視もまた，きわめて特徴的であった。同様な結果は，われわれの調査（渡辺，2003，2006）でも確認されている。これらの資料から，①思春期における心の動揺（気持ちの落ち込みやストレス）が，日本では，主として友人関係から生じ，中国では，勉強や試験や宿題や成績から生じると仮定することにした。また，②心の動揺は，われわれの以前の研究や各種の調査報告などから，日本の子どもが中国の子どもより頻度が多いことも予測した。さらに，③心の動揺する出来事についても，社会的文化的背景の相違を反映して，両国に共通する出来事がある一方，異なる出来事があると考えられた。加えて，④勉強重視と友人重視の相違を反映して，子どもたちにとって大事なことも日本と中国では異なっていると推測した。この研究では，これらの仮定を調査資料によって検討することを目的とした。

2　平成18年度からいじめの定義が「当該児童生徒が，一定の人間関係にある者から，心理的・物理的な攻撃を受けたことにより，精神的な苦痛を感じているもの。」と変更され，また，いじめとは，以前は学校や教師がいじめと判断したものであったが，平成18年度から子どもの側がいじめと認知したものを全ていじめとすることになった。この変更に伴い，いじめの認知件数は，前年度の６倍にも増加した。

方　　法

1．調査への参加者

小学校４学年児童，中学校１学年生徒，及び高等学校１学年生徒，を調査対象者とした。日本については，愛媛県の都市部の代表的な学校[3]に通学する子どもを対象に，中国については，山東省の省都済南市の学校[4]に通学する子どもを対象に，それぞれ，調査を実施した。

具体的には，表１に示される日本の子ども314名，中国の子ども287名，計601名が調査に参加した。

表１　調査への参加者（人数）

学年	小 4		中 1		高 1	
性別	男子	女子	男子	女子	男子	女子
日　本	49	53	54	40	58	60
中　国	52	42	45	49	49	50

2．調査内容の構成

調査は，質問紙へ回答する形式で実施された。質問紙は，（1）フェイスシート，（2）「落ち込み」，（3）ストレス，（4）心の動揺する出来事，及び（5）大事なことに関する調査項目群から構成された。

（1）フェイスシート：調査実施日，学年，及び性別の記入を求めた。

（2）「落ち込み」：①「人はだれでも『おちこむ』ことがあります。どのくらい，あなたは『おちこむ』ことがありますか。」と問い，５件法によって，すなわち，１．「まったくおちこまない」，２．「月に２どおちこむ」，３．「週に１どおちこむ」，４．「週になんどかおちこむ」，５．「ほとんど毎日おちこむ」のいずれかを選択させ，得点が高いほど「落ち込む」頻度が高くなるように得点化した。その後，②「この一か月で，あなたがもっともおちこんだのは，どんなときでしたか。」と問い，自由記述による回答を求めた。

（3）ストレス：①「あなたは，どのくらいストレス（こころのおもにになること）を感じますか。」と問い，５件法によって，すなわち，１．「まったくかんじない」，２．「月に２どかんじる」，３．「週に１どかんじる」，４．「週になんどかかんじる」，５．「ほとんど毎日かんじる」のいずれかを選択させ，得点が高いほど「ストレス」の頻度が高くなるように得点化した。その後，②「この一か月で，あなたがもっともストレスを感じたのは，どんなときでしたか。」と問い，自由記述による回答を求めた。

（4）心の動揺する出来事：①「次の出来事がおきたら，どのくらい心が動揺するか（心が乱れるか・オロオロするか）答えて下さい。」と問い，「５（とても動揺する・オロオロする）から，１（動揺しない・乱れない・オロオロしない）まで，どれか一つの数字を選んでください。」と５件法で回答を求めた。すなわち，１．動揺しない，２．すこし動揺する，３．いくらか動揺する，４．かなり動揺する，及び５．とても動揺する，のいずれかを選択させ，動揺の程度が大きいほど高得点になるように得点化した。出来事として取り上げられたのは，１．親を失う，２．両親のケンかを見たり聞いたりする，３．物をぬすんでつかまる，４．ウソをついていると疑われる，５．悪い成績をとる，６．道に迷う，７．クラスの中で笑いものにされる，及び８．新しい学校へ転校する，の８つの出来事であった。その後，②これらの８つの出来事それぞれについて，体験したことがあるかどうかについて，「はい」と「いいえ」で回答を求めた。

（5）大事なこと：①「あなたにとって，もっともだいじなことの前の（　）に１，２ばんめにだいじなことの前の（　）に２，３ばんめにだいじなことの前の（　）に３，あなたにとって，もっともだいじでないことの前の（　）に４，と書いてください。」と問題を提示し，（　）学校の勉強／（　）外見，かおやかっこうやスタイルなど／（　）友だち／（　）運動，スポーツなど，に数字を記入することを求めた。次いで，②「１．あなたにとって，学校でよい成績をとることは，どのくらいだいじですか。」，「２．あなたにとって，かっこいいことは，どのくらいだいじですか。」，「３．あなたにとって，たくさんの友だちをもつことは，どのくらいだいじ

3　「代表的な」とは，特殊でなく「一般的な」・「普通の」を意味する。従って，多様な家庭的背景を持つ児童生徒が対象とされた。しかし，高等学校については，一般にいわれる難易度が中程度の高等学校が選択されたが，これによって，代表的な対象が選ばれたとすることには問題がある。

4　中国についても，「代表的な」学校を選択するように努力した。中学校と高等学校は，済南市の代表的な学校であったが，小学校は，実験学校であった。第二著者によれば，小学校の実験学校は，上級学校の実験学校に比して，代表的な学校との相違が少なく，「同等とも言える」とのことであった。いずれにしても，中国の沿海部の都市と内陸部の農村との格差が非常に大きいため，中国を代表する学校でないことは確かである。

ですか。」，及び「４．あなたにとって，スポーツがじょうずであることは，どのくらいだいじですか。」，と問い，５件法，すなわち，１．まったくだいじでない，２．すこしだいじ，３．いくらかだいじ，４．かなりだいじ，５．とてもだいじ，のいずれかを選択させ，大事であると考えるほど高得点になるように得点化した。

３．調査期日と手続き

日本の資料は，2002年２月から３月にかけて，中国の資料は，2002年10月から11月にかけて，それぞれ収集された。いずれも，調査への参加者が通学する学校の教室で，担任教師の教示のもとで，学級単位で集団的に実施された。小学生については，中学生や高校生の約２倍の時間をかけて実施された。

結　　果

１．「落ち込み」について

（１）「落ち込み」の頻度について：国別，学年別，性別に示したのが，表２である。

「落ち込み」の得点について，国と学年と性の３要因の分散分析を行なったところ，国（F(１，582)＝6.31，P＜.05）と学年（F(２，582)＝5.12，P＜.01）と性（F(１，582)＝5.74，P＜.05）に有意差が認められた。また，国と性の交互作用（F(１，582)＝11.73，P＜.01）にも有意差があった。すなわち，中国より日本が高く，男子より女子の方が高いことが示されたが，これは，日本では，男子より女子が高いのに対して，中国では，男子と女子がほぼ同様であることを反映したものであった。学年差については，Tukey 法による事後検定の結果，小学４年生より高校１年生の得点が有意（P＜.01）に高いことが示された。

（２）「落ち込み」の理由について：自由記述の内容を，１．勉強・試験・成績・宿題，２．友人関係，３．家族関係，４．運動・試合・部活，５．自分，６．物の紛失・破損，７．その他，８．なし，９．無回答のカテゴリーに区分した。中国については，10．日時（休みの時，日曜、月・木など）のカテゴリーを追加した。

この結果を国別に示したのが，図１である。日本と中国に共通して，１．勉強・試験・成績・宿題（学業）のカテゴリーが多かったが，中国が相対的により多かった。また，３．家族関係については，日本と中国の相違は見られなかったが，２．友人関係は，日本の方がはるかに多かった。さらに，日本で多いカテゴリーは，４．運動・試合・部活，５．自分，及び６．物の紛失・破損であり，中国にのみ見られたのは，10．日時であった。

表２　国別，学年別，性別にみた「落ち込み」の平均得点（カッコ内は標準偏差）

学年	小 4		中 1		高 1		全 体	
性	男	女	男	女	男	女	男	女
日 本	2.17 (1.06)	2.77 (1.07)	2.35 (1.03)	2.80 (1.32)	2.43 (1.06)	2.95 (1.02)	2.33 (1.05)	2.85 (1.12)
中 国	2.10 (1.05)	2.07 (1.30)	2.48 (1.11)	2.35 (.93)	2.62 (1.31)	2.50 (.86)	2.39 (1.17)	2.32 (1.04)

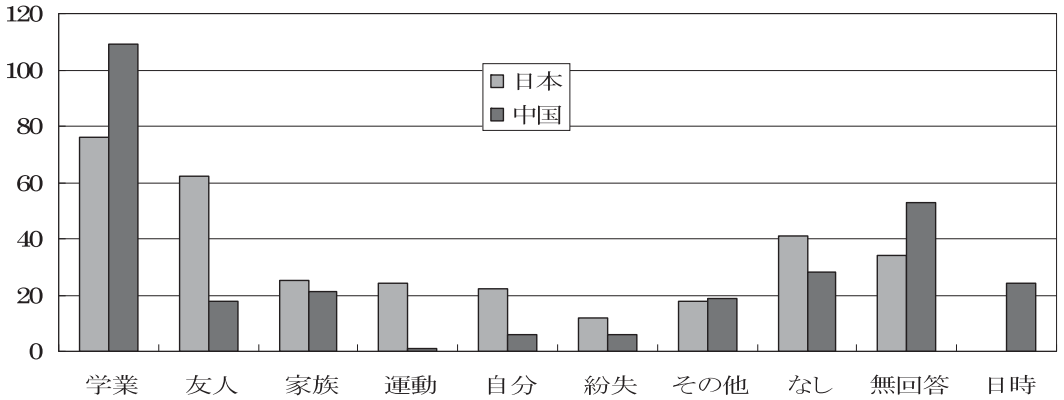

図１　「落ち込み」の内容の日中比較

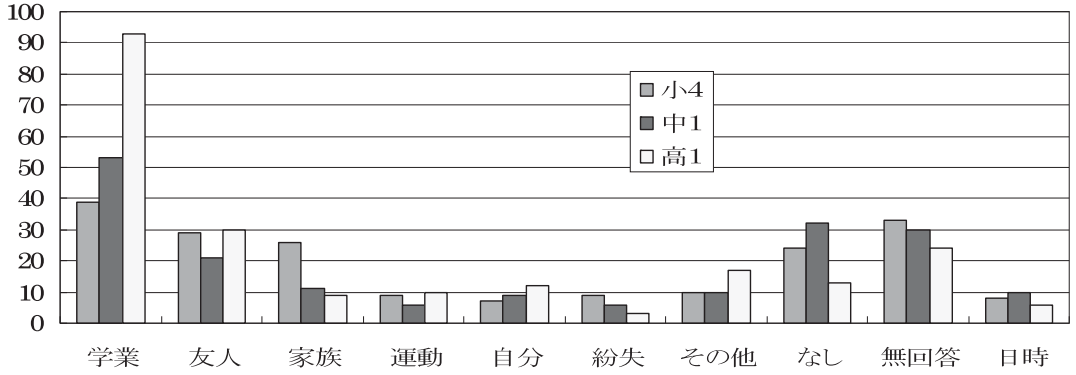

図２　学年別に見た「落ち込み」の内容

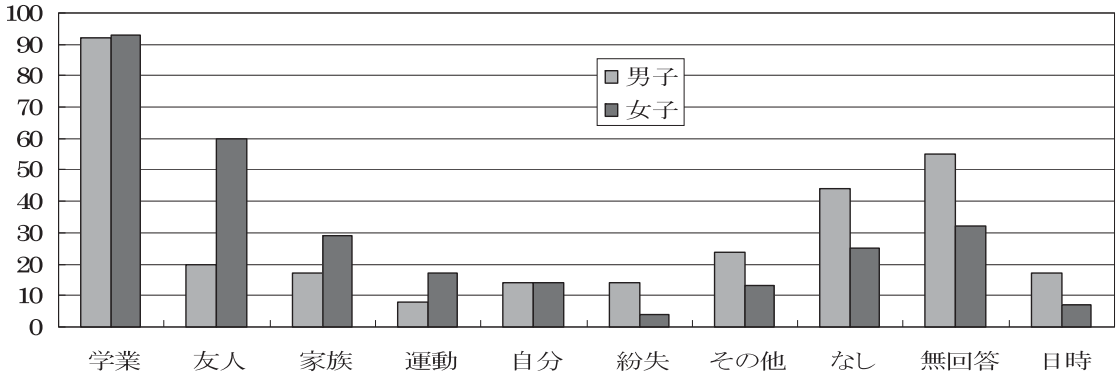

図３　性別に見た「落ち込み」の内容

なお，８．なしと９．無回答を合せると，日本と中国間に相違は認められなかった。

学年別に，「落ち込み」の理由を示すと，図２のようになった。学年とともに，１．勉強・試験・成績・宿題（学業）が増加すること，小学校から中学校にかけて３．家族関係が減少すること，中学校から高校にかけて８．なしが減少することなどが特徴的であった。

また，性別に，「落ち込み」の理由を示すと，図３のようになった。１．勉強・試験・成績・宿題（学業）は男女ともに多いが，２．友人や３．家族については女子に多く，８．なしや９．無回答は男子に多いことが示された。

２．ストレスについて

（１）ストレスの頻度について：国別，学年別，性別に示したのが，表３である。

「ストレス」の得点について，国と学年と性の３要因の分散分析を行なったところ，国（F(１，578)＝4.35，P<.05）と学年（F(２，578)＝16.92，P<.001）に有意差が認められた。また，国と性の交互作用（F(１，578)＝7.65，P<.01）にも有意差があった。すなわち，中国より日本が高いことが示されたが，この国による相違は，日本の女子が中国の女子より高いことに起因していた。男子には国による相違は認められなかった。また，日本でも中国でも，学年の上昇とともに，ストレスが増加することも示された。学年差について事後検定した結

表３　国別，学年別，性別にみたストレスの平均得点（カッコ内は標準偏差）

学年	小　4		中　1		高　1		全　体	
性	男	女	男	女	男	女	男	女
日　本	2.49 (1.28)	2.85 (1.38)	2.80 (1.29)	3.20 (1.32)	3.05 (1.29)	3.54 (1.06)	2.80 (1.30)	3.21 (1.27)
中　国	2.43 (1.51)	2.10 (1.10)	3.02 (1.37)	2.71 (1.37)	3.11 (1.49)	3.20 (1.23)	2.84 (1.49)	2.70 (1.31)

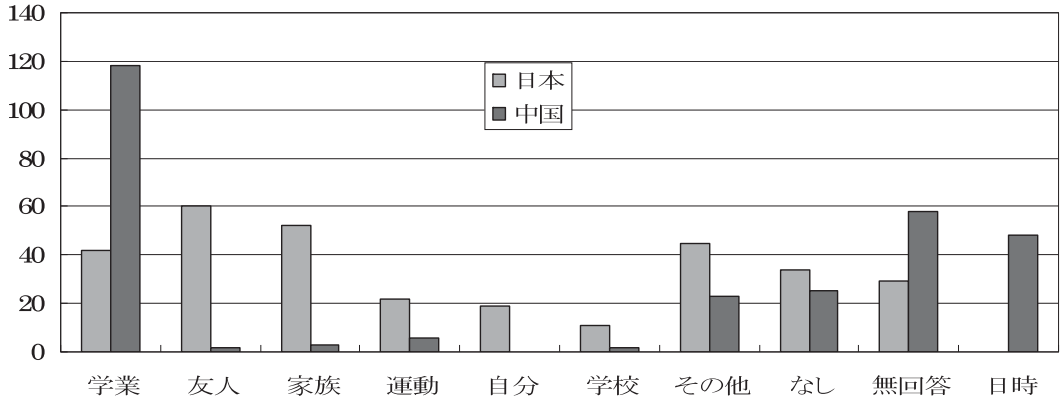

図４　ストレスの内容の日中比較

果，小学生と中学生間にも，中学生と高校生間にも，有意差（P<.05）が認められた。

（２）ストレスの理由について：自由記述の内容を，１．勉強・試験・成績・宿題，２．友人関係，３．家族関係，４．運動・試合・部活，５．自分，６．学校・クラス・先生，７．その他，８．なし，９．無回答のカテゴリーに区分した。中国については，10．日時（夜，毎日，朝起きる時，月曜，日曜など）のカテゴリーを追加した。

この結果を国別に示したのが，図４である。特に中国において，１．勉強・試験・成績・宿題のカテゴリーが突出しているのが特徴的であった。日本でも，１．勉強・試験・成績・宿題のカテゴリーが一定の比率を占めていたが，それ以上に，２．友人関係や３．家族関係が多かった。中国では，これらのカテゴリーはきわめて少なかった。また，日本では，５．自分や４．運動・試合・部活が多く，中国でのみ多数見られたのは，10．日時であった。

学年別に，ストレスの理由を示すと，図５のようになった。学年とともに１．勉強・試験・成績・宿題のカテゴリーが増加すること，小学生と中学生において８．なしが多く，高校生で８．なしが急減すること，中国のみであるが，10．日時が学年とともに増加することなどが特徴的であった。

また，性別に，ストレスの理由を示すと，表４のようになり，すなわち，９．無回答が男子に多く，２．友人関係や３．家族関係や７．その他がやや女子に多い程度に留まっており，性差は明瞭には示されなかった。

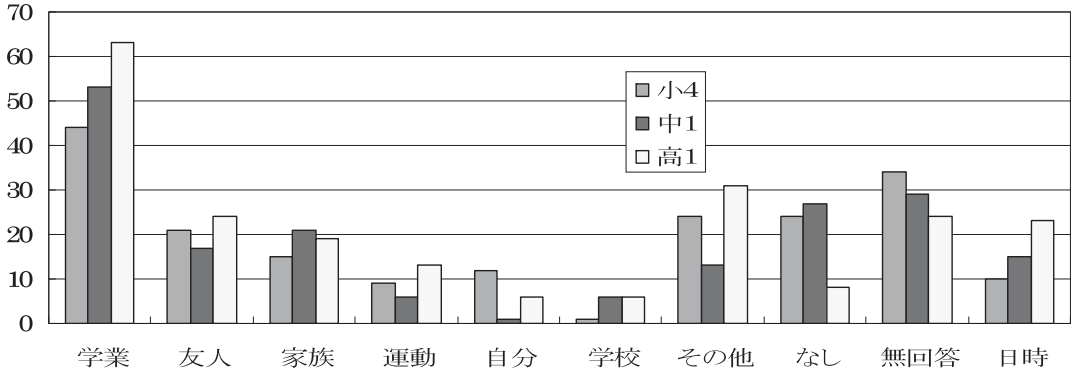

図５　学年別に見たストレスの内容

表４　性別に見たストレスの内容

理由	学業	友人	家族	運動	自分	学校	その他	なし	無回答	日時
男子	79	28	25	16	10	7	29	32	52	27
女子	78	34	30	12	9	6	39	27	35	21

3．心が動揺する出来事について

（1）心が動揺する程度について：8つの出来事が起った場合，どの程度心が動揺するか，日本と中国に分けて示したのが，表5と表6である。

この得点をもとにして，各出来事別に，国と学年と性の3要因の分散分析を行なった。「親を失う」については，いずれにも有意差はなく，日本より中国が高いという傾向が認められる（F(1，570)＝3.82，P<.1）に留まった。

「両親のケンカを見たり聞いたりする」については，国と学年と性の主効果に有意差（それぞれ，F(1，575)＝17.59，P<.001：F(2，575)＝5.57，P<.01：F(1，575)＝4.34，P<.05）が見られ，また，国と学年，及び国と性の交互作用にも有意差（それぞれ，F(2，575)＝12.09，P<.001：F(1，575)＝4.44，P<.05)）が認められた。すなわち，中国が高く，小4や中1よりも高1が低く，女子の方が高いという結果であったが，国と学年の交互作用は，日本では学年の進行とともに低くなるのに対して，中国では中学生が最も高いこと，及び国と性の交互作用は，日本では性差があまりないのに対して，中国では女子の方が高いこと，をそれぞれ示していた。

「物を盗んでつかまる」については，学年においてのみ有意差が認められ（F(2，568)＝3.44，P<.05)，事後検定の結果，小4が中1や高1よりも低いことが示された（P<.05)。

表5　日本における心の動揺の程度の平均得点（カッコ内は標準偏差）

学年	小4		中1		高1		全体	
性別	男	女	男	女	男	女	男	女
親を失う	4.48 (1.07)	4.40 (1.01)	4.25 (1.09)	4.33 (.97)	4.36 (.99)	4.68 (.77)	4.36 (1.05)	4.49 (.92)
親のケンカの見聞	3.12 (1.45)	3.71 (1.17)	3.11 (1.27)	2.85 (1.49)	2.52 (1.13)	2.58 (1.11)	2.90 (1.30)	3.05 (1.33)
物を盗みつかまる	3.92 (1.30)	4.13 (1.06)	4.26 (.98)	4.08 (1.25)	4.21 (.93)	4.45 (.81)	4.14 (1.08)	4.24 (1.03)
ウソを疑われる	2.67 (1.23)	3.60 (1.06)	2.79 (1.21)	3.18 (1.34)	2.98 (1.03)	3.42 (1.03)	2.82 (1.16)	3.42 (1.13)
悪い成績	2.50 (1.41)	3.40 (1.42)	2.89 (1.44)	3.15 (1.41)	2.62 (1.23)	2.80 (1.04)	2.67 (1.36)	3.10 (1.30)
道に迷う	3.15 (1.32)	3.53 (1.30)	2.47 (1.45)	2.88 (1.42)	2.19 (1.15)	2.73 (1.19)	2.57 (1.36)	3.05 (1.33)
クラスで笑いもの	2.88 (1.42)	3.34 (1.33)	2.72 (1.08)	3.38 (1.46)	2.71 (1.24)	3.43 (1.24)	2.76 (1.25)	3.39 (1.32)
転校する	3.67 (1.37)	3.45 (1.34)	3.58 (1.32)	3.48 (1.52)	3.48 (1.23)	3.50 (1.24)	3.57 (1.30)	3.48 (1.34)

表6　中国における心の動揺の程度の平均得点（カッコ内は標準偏差）

学年	小4		中1		高1		全体	
性別	男	女	男	女	男	女	男	女
親を失う	4.48 (.99)	4.54 (.99)	4.65 (.84)	4.69 (.83)	4.57 (.87)	4.50 (.81)	4.57 (.90)	4.58 (.87)
親のケンカの見聞	2.74 (1.11)	3.57 (1.14)	3.49 (1.26)	3.83 (1.00)	3.50 (1.11)	3.30 (.95)	3.25 (1.21)	3.56 (1.04)
物を盗みつかまる	3.81 (1.38)	4.19 (1.20)	4.37 (1.00)	4.42 (.96)	4.16 (1.10)	4.28 (1.03)	4.12 (1.18)	4.30 (1.05)
ウソを疑われる	3.33 (1.54)	3.97 (1.21)	3.65 (1.36)	3.98 (1.23)	3.64 (1.28)	3.62 (1.03)	3.54 (1.39)	3.84 (1.16)
悪い成績	3.52 (1.27)	3.64 (1.14)	3.67 (1.23)	3.98 (1.00)	3.50 (1.23)	3.46 (.95)	3.57 (1.24)	3.70 (1.04)
道に迷う	2.50 (1.23)	3.46 (1.46)	2.60 (1.33)	3.06 (1.28)	2.11 (1.22)	1.98 (.96)	2.40 (1.27)	2.77 (1.37)
クラスで笑いもの	2.93 (1.42)	3.78 (1.44)	3.35 (1.66)	3.54 (1.30)	3.27 (1.32)	3.34 (1.29)	3.19 (1.47)	3.53 (1.34)
転校する	2.40 (1.56)	2.27 (1.28)	2.12 (1.24)	2.40 (1.32)	2.11 (1.32)	2.16 (1.00)	2.21 (1.37)	2.27 (1.19)

「ウソをついていると疑われる」については，国と性に有意差が認められた（それぞれ，F(1，577)＝33.47，P<.001：F(1，577)＝19.31，P<.001)。すなわち，日本より中国が高く，男子より女子の方が高かった。

「悪い成績をとる」については，国と学年と性の主効果が有意であった（それぞれ，F(1，580)＝48.94，P<.001：F(2，580)＝4.21，P<.05：F(1，580)＝7.79，P<.01)。交互作用は有意でなかった。すなわち，中国が日本よりはるかに高く，中1が高1より高く（P<.05)，男子より女子の方が高かった。

「道に迷う」については，学年差と性差，及び国と学年の交互作用に有意差が認められた（それぞれ，F(2，574)＝25.97，P<.001：F(1，574)＝17.37，P<.001：F(1，574)＝3.18，P<.05)。すなわち，学年進行とともに低下すること（小4と中1間にも，中1と高1間にも有意差（P<.05))，日本では学年進行とともに次第に低下するのに対して，中国では小4と中1がほぼ同じ水準にあって，高1で急に低下すること，及び男子より女子の方が高いこと，が示された。

「クラスの中で笑いものにされる」については，国と性の相違が有意であった（それぞれ，F(1，572)＝6.94，P<.01：F(1，572)＝19.09，P<.001)。すなわち，中国の方が日本より高く，男子より女子が高かった。

「新しい学校へ転校する」については，国による相違のみが有意であった(F（1，573)＝137.28，P<.001)。すなわち，日本の方が中国よりはるかに高かった。

これらの心の動揺の程度について，日本と中国の比較を示したのが，図6である。親失や物盗が日中両国とも高く，成績やウソが中国で高く，転校が日本で高いことがわかる。

（2）心が動揺する出来事の経験の有無について：8つの出来事に関して，経験したことがあるかどうかを問い，その回答結果を日本と中国別に示したのが，表7と表8である。

両国に共通して，当然であるが，「親を失う」や「物を盗んでつかまる」が少なく，「両親のケンカを見たり聞いたりする」や「ウソをついていると疑われる」が相対的に多かった。また，両国とも，「クラスの中で笑いものにされる」や「新しい学校へ転校する」が相対的に少なかった。転校については，中国の方が多い様子も見

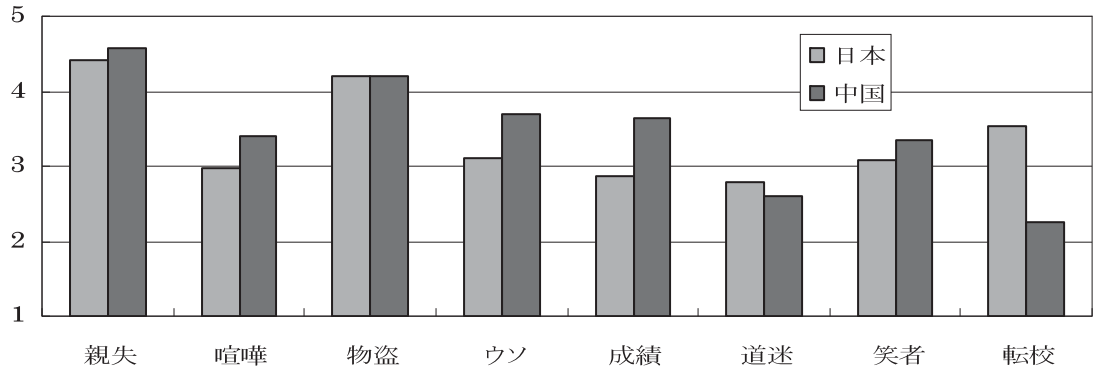

図6　心の動揺の程度の日中比較

表7　日本における心を動揺させる出来事の体験の有無

学年	小4				中1				高1				全体			
性別	男		女		男		女		男		女		男		女	
有無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
親を失う	1	47	4	48	4	50	4	36	2	56	4	56	7	153	12	140
親の喧嘩	30	18	34	19	29	25	29	11	46	12	52	8	105	55	115	38
物を盗む	1	47	0	52	4	50	3	37	8	50	7	53	13	147	10	142
ウソ疑う	21	26	22	31	43	11	27	13	50	8	48	12	114	45	97	56
悪い成績	22	25	21	32	40	14	35	5	52	6	55	5	114	45	111	42
道に迷う	21	25	25	28	21	33	25	15	43	15	41	19	85	73	91	62
笑いもの	12	36	19	34	31	23	10	30	26	32	22	38	69	91	51	102
転校する	5	43	11	42	6	48	8	32	18	40	14	46	29	131	33	120

表８　中国における心を動揺させる出来事の体験の有無

学年	小4				中1				高1				全体			
性別	男		女		男		女		男		女		男		女	
有無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
親を失う	0	50	1	41	0	44	2	46	0	47	0	49	0	141	3	136
親の喧嘩	40	10	25	17	38	6	32	17	33	14	35	14	111	30	92	48
物を盗む	3	47	3	39	9	35	5	44	0	47	2	47	12	129	10	130
ウソ疑う	32	17	12	30	35	9	23	26	23	23	31	18	90	49	66	74
悪い成績	37	13	32	10	42	2	42	6	44	4	47	3	123	19	121	19
道に迷う	11	39	6	36	11	33	15	33	12	35	23	27	34	107	44	96
笑いもの	17	33	7	33	22	22	10	37	12	35	11	38	51	90	28	108
転校する	8	42	4	37	22	22	20	28	17	30	18	31	47	94	42	96

られた。一方，「道に迷う」は，中国より日本が多く，「悪い成績をとる」は，日本より中国が多かった。この日本と中国の相違について，χ^2 検定（「親を失う」のみ直接確率法による検定）を行ったところ，「親を失う」，「ウソをついていると疑われる」，「道に迷う」，及び「クラスの中で笑いものにされる」は，中国より日本で多く，「悪い成績をとる」，及び「新しい学校へ転校する」は，日本より中国で多かった。「クラスの中で笑いものにされる」が，５％水準で有意であった以外，全て１％水準で有意であった。

４．大事なことについて

（１）勉強，外見，友だち，及び運動の相対的な重要性

勉強，外見，友だち，及び運動を提示し，大事な順に１～４の番号を記入するよう求め，これを得点として，その平均得点を日本と中国について示したのが，表９と表10である。したがって，得点が小さいほど順位が高いことを示している。

日本では，各年齢段階を通して，友だちが，最も重要であると順位づけられていた。しかし，その他の事柄については，学年や性別によって異なる順位づけが行われていた。小学生では，両性とも，友だちに次いで，勉強，運動，外見の順になっていた。しかし，中学生や高校生では，その順位は，性別によっても異なり，男子では，友だち，運動，外見≒勉強の順，女子では，友だち，外見，勉強，運動の順であった。

勉強について，学年と性の２要因の分散分析を行なうと，学年差（F(２，301)＝22.31，P＜.001）が有意で

表９　日本における勉強，外見，友だち，及び運動の相対的重要性（カッコ内は標準偏差）

学年	小4		中1		高1		全体	
性別	男	女	男	女	男	女	男	女
勉強	2.26 (.87)	2.15 (.83)	3.02 (.95)	2.72 (.83)	2.98 (1.00)	2.97 (.84)	2.78 (1.00)	2.62 (.90)
外見	3.77 (.56)	3.63 (.63)	2.96 (.94)	2.69 (1.13)	2.98 (.90)	2.48 (.89)	3.21 (.90)	2.93 (1.02)
友だち	1.32 (.69)	1.31 (.64)	1.28 (.63)	1.31 (.52)	1.16 (.46)	1.15 (.44)	1.25 (.60)	1.25 (.54)
運動	2.62 (.68)	2.90 (.75)	2.75 (.94)	3.18 (.97)	2.77 (.87)	3.40 (.69)	2.72 (.84)	3.17 (.81)

表10　中国における勉強，外見，友だち，及び運動の相対的重要性（カッコ内は標準偏差）

学年	小4		中1		高1		全体	
性別	男	女	男	女	男	女	男	女
勉強	1.26 (.74)	1.18 (.51)	1.68 (1.11)	1.31 (.68)	1.88 (1.09)	1.80 (.81)	1.60 (1.01)	1.44 (.73)
外見	3.76 (.57)	3.72 (.56)	3.05 (1.09)	3.29 (1.05)	3.24 (1.03)	3.26 (.98)	3.36 (.96)	3.41 (.92)
友だち	2.42 (.69)	2.59 (.88)	2.17 (1.06)	2.04 (.79)	1.90 (.79)	1.54 (.72)	2.17 (.88)	2.03 (.89)
運動	2.56 (.76)	2.51 (.68)	2.71 (.81)	2.76 (.88)	2.98 (.84)	3.13 (.78)	2.74 (.81)	2.81 (.82)

あり，小4と中1以上間に相違（P<.001）が認められ，小4の順位が高かった。外見については，学年差（F(2，301)=39.35，P<.001）が有意で，小4と中1以上間に相違（P<.001）が認められ，小4の順位が低かった。また，性差（F(1，301)=9.24，P<.01）も有意で，女子の順位が高かった。友だちについては，学年差（F(2，301)=2.50，P<.1）に傾向が認められるに留まり，学年とともに，順位が上がる様子が見られた。また，運動については，学年差（F(2，301)=4.21，P<.05）が有意で，小4より高1の順位が低かった（P<.05）他，性差（F(1，301)=22.56，P<.001）も有意で，男子の順位が高かった。

中国では，各年齢段階を通して，外見が，最も低く順位づけられていた。全体として，最も高く順位づけられていたのは，勉強であったが，高1女子では，友だちが最も高く位置づけられており，高1では，男子についても，友だちと勉強は，ほぼ同様な水準にあった。小4では，勉強に次いで，男女とも，友だちと運動が，同じように位置づけられていたが，中1や高1では，運動は第3位に後退していた。友だちは，中1になると，第2位に上がっていた。

勉強について，学年と性の2要因の分散分析を行なうと，学年差（F(2，257)=11.75，P<.001）が有意であり，小4と高1間（P<.001），及び中1と高1間（P<.05）に相違が認められ，学年とともに順位が下がっていた。また，性差（F(1，257)=2.91，P<.1）に傾向があり，女子の順位が高い様子が観察された。外見については，学年差（F(2，255)=9.61，P<.001）が有意で，小4と中1以上間に相違（P<.01）が認められ，小4の順位が低かった。友だちについては，学年差（F(2，257)=19.20，P<.001）に有意差があり，小4と中1以上間，及び中1と高1間（いずれも，P<.01）に相違が認められ，学年とともに，順位が上がっていた。また，運動についても，学年差（F(2，257)=9.32，P<.001）が有意で，小4と高1間（P<.001），及び中1と高1間（P<.05）に相違があり，学年とともに順位が低くなっていた。

これについて，再度，国の要因を入れ，国と学年と性の3要因の分散分析を行なった。勉強については，国の相違（F(1，558)=249.80，P<.001）が有意で，中国の順位が高く，また，学年差（F(2，558)=31.33，P<.001）も有意で，小4と中1以上間（P<.001），及び中1と高1間（P<.01）に差があり，学年とともに順位が下がり，加えて，性差（F(1，558)=4.65，P<.05）も有意で，女子の順位が高いという結果であった。外見については，国の相違（F(1，556)=15.97，P<.001），学年差（F(2，556)=41.17，P<.001），国と学年の交互作用（F(2，556)=3.57，P<.05），及び国と性の交互作用（F(1，556)=6.33，P<.05）に有意差が認められた。中国が日本より順位が低く，小4より中1と高1の順位が高かった（いずれも，P<.001）が，中国では中1が最も高いのに対して，日本では高1が最も高いこと，及び日本では女子の順位が高いのに対して，中国では男子の順位が高いことが示されていた。友だちについては，国の相違（F(1，558)=210.12，P<.001），学年差（F(2，558)=21.63，P<.001），及び国と学年の交互作用（F(2，558)=9.55，P<.001）に有意差が認められた。すなわち，日本の順位が高く，中1以下より高1の順位が高かった（P<.001）が，日本では学年差が小さいのに対して，中国では学年差が大きく，学年とともに順位が上がることを示していた。運動については，国の相違（F(1，558)=5.70，P<.05），学年差（F(2，558)=12.94，P<.001），性差（F(1，558)=13.33，P<.001）の主効果が有意であった他，国と性の交互作用（F(1，558)=8.46，P<.01）も有意であった。すなわち，中国の順位が相対的に高く，学年とともに順位が低下し，女子の順位が低かったが，中国では性差が小さいのに対して，日本では性差が大きかった。

（2）成績，かっこいいこと，友だち，及びスポーツの大事さの程度

成績，かっこいいこと，友だち，及びスポーツの大事さの程度を，それぞれ5件法で得点化し，日本と中国の結果を示したのが，表11と表12である。

日本では，全学年及び男女とも，友だちの得点が高いことが特徴的であった。また，小4で，成績の得点が相対的に高いこと，男子で，スポーツの得点が高いこと，及び中1や高1で格好良さの得点が相対的に高くなることも注目された。一方，中国では，相対的に成績の得点が高いこと，及び全体として格好良さの得点が低いことが示された。また，高1になると友だちの得点が最も高

表11　日本における成績，かっこいいこと，友だち，及びスポーツの大事さ（カッコ内は標準偏差）

学　年	小　4		中　1		高　1		全　体	
性　別	男	女	男	女	男	女	男	女
成　　績	3.81 (1.06)	3.98 (1.07)	3.76 (1.16)	3.78 (1.05)	3.37 (1.10)	3.45 (1.02)	3.63 (1.12)	3.72 (1.06)
格好良さ	2.26 (1.15)	2.68 (1.12)	3.50 (1.15)	3.44 (1.33)	3.26 (1.08)	3.50 (1.02)	3.04 (1.23)	3.20 (1.20)
友 だ ち	4.74 (.57)	4.73 (.49)	4.52 (.79)	4.50 (.91)	4.44 (.98)	4.53 (.75)	4.56 (.82)	4.59 (.72)
スポーツ	3.72 (1.21)	3.47 (1.07)	3.78 (1.21)	3.38 (1.35)	3.75 (1.02)	3.03 (.90)	3.75 (1.14)	3.27 (1.10)

表12　中国における成績，かっこいいこと，友だち，及びスポーツの大事さ（カッコ内は標準偏差）

学　年	小　4		中　1		高　1		全　体	
性　別	男	女	男	女	男	女	男	女
成　　績	4.40 (.87)	3.97 (1.16)	4.39 (1.04)	4.59 (.79)	3.89 (1.34)	4.02 (1.11)	4.23 (1.11)	4.21 (1.05)
格好良さ	1.92 (1.16)	2.53 (1.39)	2.86 (1.34)	2.57 (1.19)	2.98 (1.36)	2.57 (1.26)	2.57 (1.37)	2.56 (1.26)
友 だ ち	3.67 (1.42)	3.28 (1.39)	3.82 (1.32)	3.84 (1.14)	4.26 (.95)	4.43 (.82)	3.91 (1.26)	3.89 (1.20)
スポーツ	3.90 (1.24)	3.82 (1.10)	3.75 (1.16)	4.18 (.78)	3.49 (1.18)	3.33 (1.05)	3.72 (1.20)	3.77 (1.04)

くなることも特徴的であった。スポーツについては，相対的に高い得点を示していた。

これらの得点について，国と学年と性の３要因の分散分析を行なった。成績については，国の相違（F(１，573)＝34.03，P<.001），及び学年差（F(２，573)＝9.76，P<.001）に有意差が認められた。すなわち，中国が日本より高く，小４と中１が高１より高かった（P<.01）。格好良さについては，国の相違（F(１，572)＝28.26，P<.001）と学年差（F(１，558)＝23.66，P<.001）の主効果，及び学年と性の交互作用（F(２，572)＝4.56，P<.05）に有意差が認められた。中国が日本より低く，小４より中１と高１が高かった（P<.001）。交互作用は，中１や高１では性差が認められないが，小４では，男子が女子よりも低いことから生じていることがわかった。友だちについては，国の相違（F(１，573)＝71.49，P<.001）と学年差（F(２，573)＝5.49，P<.01），及び国と学年の交互作用（F(２，573)＝15.83，P<.001）が有意であった。すなわち，日本が中国より高く，小４と中１より高１が高かった（P<.05）が，交互作用は，日本では，学年とともに低下する様子も観察されたが，高い得点水準で推移するのに対して，中国では，学年とともに得点が高くなっていき，高１では日本との相違がなくなることを反映していた。スポーツについては，国の相違（F(１，573)＝5.77，P<.05），学年差（F(２，573)＝6.69，P<.01），性差（F(１，573)＝4.54，P<.05），及び国と性の交互作用（F(１，573)＝8.06，P<.01）が有意であった。すなわち，中国が日本より高く，小４と中１より高１が低く（それぞれ，P<.05，P<.01），女子より男子が高かったが，国と性の交互作用は，中国では，性差が少なく，むしろ女子の方が男子より高いのに対して，日本では，女子より男子が高いことを反映していた。

要　約　的　討　論

愛媛県の都市部，及び中国の済南市に居住する小学校４年生，中学校１年生，及び高校１年生，計601名を対象にして，（１）気持ちが落ち込むこと，（２）ストレスを感じること，（３）心が動揺する出来事，及び（４）大事なことについて，調査を行った。そして，これらの調査資料をもとに，（１）思春期における心の動揺（気持ちの落ち込みやストレス）が，日本では，友人関係から，中国では，勉強や試験や宿題や成績（学業）から生じる，（２）日本の子どもの方が中国の子どもより，心が動揺する頻度が多い，（３）社会的文化的背景の相違を反映して，心の動揺する出来事についても，日本と中

国では，共通する出来事がある一方で，異なる出来事がある，（4）勉強や成績を重視する中国と友人関係を重視する日本では，子どもたちにとって大事なことも異なっている，との仮定を検討した。

（1）気持ちが落ち込むこととストレスを感じること

① 気持ちが落ち込む理由：日本と中国に共通して最も多く挙げられたのは，勉強・試験・宿題・成績（学業）であった。この時期の子どもたちの置かれている状況を反映していると解することができる。しかし，このカテゴリーを挙げる子どもの数は，中国の方がはるかに多かった。これは，中国での学業における競争の激しさと親の期待の大きさから説明することができる（Benesse 教育研究開発センター企画・制作，2008）。逆に，日本が中国に比べて格段に多かったのは，友人関係，及び運動・試合・部活であった。友人関係が多いのは，他の調査結果（河地，2003：渡辺，2006）や常識的理解から推測される内容と一致している。また，運動・試合・部活についても，負けることによる落ち込みばかりでなく，そこでの対人関係とも関連しているのではないであろうか。中国でのみ挙げられたカテゴリーとしては，日時があった。これは，質問の日本語と中国語の守備範囲の相違を示すと同時に，勉強や宿題などとの関連を推測することもできる。また，学年差では，学年が高くなるに伴って，勉強・試験・宿題・成績が多くなること，さらに，性差では，勉強・試験・宿題・成績には相違が認められないが，友人関係や家族関係が女子に多く，無回答や「なし」が男子に多いのが特徴的であった。これらの結果は，常識的理解と一致している。

② ストレスを感じる理由：日本と中国で大きく異なっており，日本では，友人関係が第一位，家族関係が第二位，勉強・試験・宿題・成績が第三位であったのに対して，中国では，勉強・試験・宿題・成績が突出していた。次いで，無回答，日時と続いていた。この結果についても，落ち込みと同様の説明が可能である。日時について，説明を付加すると，「夜，宿題をする時」・「朝起きる時，疲れて起きられない」などとの回答があり，勉強・試験・宿題・成績を重視する社会のストレスへの影響を読み取ることができる。学年差では，学年が上がるにつれて，勉強・試験・宿題・成績が増加し，無回答や「なし」が減少していた。性差は，あまり顕著でなかった。

このような結果は，「気持ちの落ち込みやストレスが，日本では，友人関係から，中国では，勉強や試験や宿題や成績（学業）から生じる」とする仮定を支持している。

（2）気持ちが落ち込んだり，ストレスを感じる頻度

① 気持ちが落ち込む頻度：日本が中国より多く，女子が男子より多かったが，国の相違と性差の交互作用から，男子には国による相違がないのに対して，日本の女子が多いことによって生じていることがわかった。小学生より高校生の頻度が多いことも明らかにされた。

② ストレスを感じる頻度：「落ち込み」と同様，日本が中国より多く，女子が男子より多かったが，これは，日本の女子の頻度が多いことによっていることが示された。また，学年が上がるに伴って，ストレスが増加することが示された。「落ち込み」やストレスの頻度が，日本の女子に多いという特徴がなぜ生まれるのか，今後検討する必要がある。また，学年上昇に伴う頻度の増加は，青年期的特徴の表現として説明することが可能である。

これらの結果は，日本の「落ち込み」やストレスが多いという仮定を支持していたが，それが，日本の女子の頻度の多さによるという新たな検討課題を提出している。

（3）心が動揺する出来事

① 心が動揺する程度：「転校」と「道に迷う」あるいは同等であった「物を盗む」を例外として，全体として，中国が日本より高かった。日本と中国に共通して，動揺の程度が高かったのは，当然ではあるが，「親を失う」と「物を盗んでつかまる」であった。また，日本と中国で大きく相違し，日本が高かったのは，「新しい学校へ転校する」であり，中国が高かったのは，「悪い成績をとる」と「ウソをついていると疑われる」であった。また，「親のケンカを見たり聞いたりする」や「クラスで笑いものにされる」は，中国でやや高く，「道に迷う」は，日本でやや高かった。

「転校」の相違は，対人関係構築上の困難が日本で多く，「成績」の相違は，中国における社会的期待の高さから説明することができる。「ウソ」や「笑いもの」についての解釈は難しいが，規範意識に関わる問題がある可能性を指摘することが出来る。

学年差は，学年とともに増加する出来事と低下する出来事が見られた。「物を盗む」は，小学生が相対的に低

かったが，「親のケンカ」は，日本では学年進行とともに低下し，「成績」は，中国では中学生が最も高く，「道に迷う」は，両国とも高校で最も低くなっていた。また，性差については，全体として，女子が男子より高かった。日本では，「転校」以外の全ての出来事で，中国では，「親を失う」と「転校」以外の出来事で，女子が高かった。

これらの結果から，「日本と中国では，共通する出来事がある一方で，異なる出来事がある」との仮定は支持され，両国の社会的文化的相違から説明することが可能である。

② 心が動揺する出来事の体験：全体的には，日本における体験が多かった。日本と中国に共通して，「親を失う」や「物を盗んでつかまる」が少なく，「両親のケンカの見聞」や「ウソをついていると疑われる」が多かった。相対的には，「新しい学校へ転校する」や「クラスの中で笑いものにされる」も少なかった。統計的には，「親を失う」，「ウソをついていると疑われる」，「道に迷う」，及び「クラスの中で笑いものにされる」が，中国より日本で多く，「悪い成績をとる」，及び「新しい学校へ転校する」が，日本より中国で多かった。日本の「親を失う」は，あるいは離婚などを含んでいるのかもしれない。「ウソ」や「笑いもの」は，日本における友人関係の問題と，「成績」は，中国における学業における競争と，それぞれ関係しているのかもしれない。

（4）子どもたちにとって大事なこと

① 勉強，外見，友だち，及び運動の相対的順位：日本では，学年や性別に関わらず，一貫して，友だちの順位が高く，中国では，全体を通して，外見の順位が低いことが特徴的であった。日本では，小学生で，勉強が第二位であったが，中学生以上では後退し，男子では運動が，女子では外見が，ともに第二位になっていた。中国では，全体としては，勉強が第一位であったが，友だちの順位が学年とともに上昇し，高校生になると，男子では勉強と肩を並べ，女子では第一位になっていた。運動は，学年進行とともに順位を下げ，中学生以後は第三位になっていた。

② 成績，かっこいいこと，友だち，及びスポーツの大事さ：中国と比較して，日本では，友だちの得点が高く，成績の得点が相対的に低いことが特徴的であった。中国では，高校生になると，友だちの得点が最も高くなって日本と同じ水準に達し，成績の得点が低下して二番目になっていた。日本では，成績の得点が学年とともに低下すること，運動の得点の性差が顕著で，男子が高く女子が低いこと，かっこいいことの得点が中学生以上で高くなることなどが示された。中国では，スポーツの得点に性差がなく，かなり高い水準にあること，かっこいいことの得点は，相対的に常に低い水準にあったが，中学生以後に上昇することなどが示された。

これらの結果は，「子どもたちが大事にしていること」が，日本と中国で異なり，発達的に変化し，性別によっても相違することを示していた。そして，日本と中国の違いは，友人関係重視の日本と学業重視の中国の相違を反映するとの仮定を支持していた。

（5）今後の課題

全体として，調査に際して立てられた仮定は，実態調査を通じて確認されたと考えられる。しかし，解明が求められる新しい課題も生み出された。今後の課題として，まず，第一に，中国でも，高校生になると，友だちが最も大事なことになるにもかかわらず，中国では，「落ち込み」やストレスの理由として，友人関係がほとんど挙げられないのとは対照的に，日本では，友人関係が，ストレスで第一位に，「落ち込み」で第二位に挙げられているが，この相違はどこから生み出されるか，を明らかにする必要がある。この研究では，明確に説明することができない。第二には，「落ち込み」やストレスを感じる頻度の日本と中国の相違は，女子において日本の頻度が高いことによることが明らかにされたのであるが，なぜ，中国では明確ではない性差が，日本において示されるのか，検討することが求められている。第三には，学業に関わる内容が，学年進行とともに，子どもの位置づけとしては低下すること，及び，それにもかかわらず，学業に関わる内容が，学年進行とともに，ストレスや「落ち込み」を引き起こす理由として多くの子どもによって挙げられるようになる実態があり，その機構を解明することが求められる。これらの他，なぜ，日本では，転校が心の動揺を引き起こし，成績が相対的に心の動揺を引き起こさないのか，あるいは，なぜ，「ウソをついていると疑われる」や「クラスで笑いものにされる」といった出来事が，中国より心の動揺を引き起こさないの

かなどの検討が，今後の課題として残されている。

文　　献

Benesse 教育研究開発センター企画・制作（2008）．研究所報　VOL.45　学習基本調査・国際6都市調査報告書　㈱ベネッセコーポレーション

Colman, A. M.（2001）. *Dictionary of Psychology*. Oxford University Press.
コールマン，A.　M.／藤永保・仲真紀子（監修）（2004）．心理学辞典　丸善

藤村幸義（2008）．老いはじめた中国　株式会社アスキー

河地和子（2003）．自信力はどう育つか―思春期の子ども世界4都市調査からの提言　朝日新聞社

越川房子（1999）．思春期　中島義明（編者代表）心理学辞典　有斐閣，338.

久世敏雄（2000）．青年期とは　久世敏雄・齋藤耕二（監修）青年心理学事典　福村出版，4－5．

久世敏雄（2001）．青年期の人格形成：疾風怒濤の概念について　愛知学院大学文学部紀要，30，35－41.

Hall, G. S.（1904）. *Adolescence: Its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion and education*. New York: Appleton.
元良勇次郎・中島力蔵・速水滉・青木宗太郎抄訳（1910）．青年期の研究　同文館（久世前掲論文，菅野文彦（1988）．G.S.ホール，『青年期』の「序文」（Granville Stanley Hall, Adolescence（New York: D. Appleton&Company，1904）の“Preface”の翻訳）西洋教育史研究，17，89－106．などによる）

姜波（2001）．中国の教育について―受験戦争から教育改革へ―　川崎医療福祉学会誌，11(1)，167－170.

加藤　潤（2002）．近代言説としての「青年期」名古屋女子大学紀要，48，23－36.

劉堅・付宣紅（2008）．北京の調査結果の特徴に関する分析　Benesse 教育研究開発センター企画・制作　研究所報　VOL.45　学習基本調査・国際6都市調査報告書　㈱ベネッセコーポレーション，80－86.

文部科学省（2007）．平成18年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について（http//www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/11/07110710.htm）

中島義明（編者代表）（1999）．心理学辞典　有斐閣

西平直喜（1995）．思春期　岡本夏木・清水御代明・村井潤一（監修）発達心理学辞典　ミネルヴァ書房，264.

清水美和（2008）．「中国問題」の内幕　筑摩書房

総務庁青少年対策本部（編）（1989）．少年の生活意識と実態に関する調査報告書　総務庁青少年対策本部

VandenBos, G. R.（Ed.）（2006）. *APA Dictionary of Psychology*. American Psychological Association.

渡辺弘純（2003）．現在と未来に対する考え方・感じ方：遼寧師範大学附属中学生と愛媛大学教育学部附属中学生の比較　渡辺弘純（代表）平成14年度愛媛大学学長裁量経費報告書，123－146.

渡辺弘純（2006）．仲間に対する寛容の精神（友人関係）と子どもの自己形成　都筑学編　思春期の自己形成―将来への不安のなかで―　ゆまに書房，139－172.

張建（2003）．社会変動期の中国における社会階層と学業達成：山東省の公立中学校の事例から（Ⅵ―6　中国の教育）日本教育社会学会大会発表要旨集録，55，314－315.